“ニヒル”と“有情”と“勇断”と

――柴田錬三郎の『眠狂四郎虚無日誌』にみるダンディズムの位相――

キーワード：ニヒル、孤独、懐疑の精神、内なる有情、果断な行動力

I はじめに

柴田錬三郎の代表作のひとつにかぞえられる“眠狂四郎シリーズ”は、文学作品の題名と内実とが有機的な繋がりを有する作品群である。第1作『眠狂四郎無頼控』[1]に始まり、『眠狂四郎独歩行』、『眠狂四郎殺法帖』、『眠狂四郎孤剣五十三次』と書き継がれたこのシリーズは、主人公名につづく語によって、すなわち“無頼”、“独歩”、“殺法”、“孤剣”の各キーワードによって、主人公の個性と作品内容を言い表す方式をとっており、シリーズ第5作目となる『眠狂四郎虚無日誌』にも、表題と内容とのこの相関性をみとめることができる。

昭和43年7月13日号から翌44年7月5日号まで『週刊新潮』に連載された『眠狂四郎虚無日誌』は1話読切りの全52話から成り、さまざまな出来事と登場人物を重層的に組み入れながら、物語を大団円に向けて収斂させていく構成となっている。その結構自体に先行4作との大きな違いはないが、作品の持つ味わいの点では第1作『無頼控』に近いものが感じられる。『無頼控』が、市井無頼の徒として生きる眠狂四郎の歩みを出生の秘密から現在にいたるまで遡及的に描き出しているのに対して、『虚無日誌』は孤独な主人公の虚無的な生の軌跡を浮き彫りにする趣向であるが、狂四郎の代名詞ともいえる“虚無”を題名に含むことといい、『無頼控』に登場した作中人物たちとの関係が改めて語られることといい、原点回帰とまではいえないまでも、第1作との共通項が見てとれるのである。このことは別言すれば、狂四郎の個性を表す“無頼”、“独歩”、“殺法”、“孤剣”、“虚無”といった語の中でも、“無頼”と“虚無”の2語がひときわ象徴的に彼の独特の個性を表現しているということであるが、銀幕用であれ、テレビ時代劇であれ、シリーズを原作とする映像化作品が、総じて狂四郎の“無頼”や“虚無”を前面に押し出している事実からもそのことが窺

われるであろう。

ともあれ、“無頼”にせよ、“虚無”にせよ、通常は肯定的なニュアンスで用いられる語ではない。にもかかわらず、なぜ作者はそうしたイメージを主人公に賦与しようとしたのであろうか。主人公をアウトローとして描こうとした結果とみる人もいるかもしれない。こうした受けとめ方を一概に見当違いといえないのは、旧来の時代小説のヒーロー像を、作者があえて反転させようとの意図を持っていたことが知られているからである。週刊誌連載を依頼された当時を振り返り、「従来の時代小説の法則を、いかに無視するか、あるいは、それに、どのように反逆するか、ということを考えた」[2]と作者が回想しているように、眠狂四郎は既成の価値観を逆転させる発想のもとに造型された。いわば太陽光を拡大鏡で一点に集めるごとく、人間の業を一身に負う存在として誕生したのである。

もちろんこのような主人公の像が、中里介山の『大菩薩峠』に登場する机竜之助を嚆矢とするニヒル剣士の系譜に連なることは否定できない。[3] ニヒルな主人公像の系譜は、『大菩薩峠』以降、大佛次郎『赤穂浪士』の堀田隼人や林不忘『新版大岡政談』の丹下左膳らへと引き継がれ、それぞれの作品誕生時の社会状況に対する「反射鏡」[4]の役割をはたすのであるが、昭和 30 年代初頭に登場した眠狂四郎も「もはや“戦後”ではない」[5]と「経済白書」に謳われた時代の転換期に、ひとつの「反射鏡」の役割を担った人物であった。主人公像の着想にあたって、「狂四郎に、現代の罪悪感を背負わせて、そのジレンマに苦しみながら生きて行かねばならぬ業を見たかったのである」[6]と柴田が語っているとおり、戦後の民主主義的価値観を反転させるかたちで狂四郎は登場してきたのである。

しかしそうした先行作品との係わりをみとめたうえで、なおもここで確認しておく必要があるのは、眠狂四郎が時代小説の地平を拓く新たなヒーローとして喝采をもって世に迎え入れられた事実である。市井の枠組みの埒外に生きる異端性を持ちながら、狂四郎は同時にすぐれてスタイリッシュな都会性を具現しているし、その洗練された趣味と教養は一流の知性に裏打ちされて、野暮や不粋とは明確に一線を画している。いうなればアウトサイダー的性格と近代的ダンディの資質を兼備したその人物像は、存在自体がひとつの逆説であり、そこには作者の奉ずるダンディズムの美学が色濃く投影されているとみることができる。小論は、眠狂四郎がニヒル剣士の系譜を引きつつも、従来のヒーロー

とは異なる精神像を具えた主人公であるとの観点に立ち、“ニヒル”、“有情”、“勇断”といった彼の資質に着目してその人間像の特質を探り、併せて彼の体現するダンディズムの特徴を分節化する試みである。

II　『眠狂四郎虚無日誌』の特徴とプロット

眠狂四郎シリーズの１作ごとに、作者は伝奇時代小説としての意匠を凝らし、新機軸を打ち出すことに努めたが、どの作品にも共通するのは、主人公が老中水野忠邦の側用人武部仙十郎の依頼をうけて謎や事件の解明にあたるという筋立てで、そこに主人公と敵対勢力との対決が組み込まれる体裁になっている。この第５作では、将軍家の世子家慶が突如乱行を重ねるようになった事態をめぐって狂四郎が真相の究明にあたり、若年寄と目付一派の企てる陰謀を打ち砕いて混乱を収拾するまでのストーリーが紡がれていく。

物語の幕開きとなるのは、旧知の松次郎が開いた二八蕎麦屋を主人公が訪れる場面で、狂四郎はそこで驟雨を逃れて店先に身を寄せた「まだ十歳あまりの」「いかにも氏素性の正しげな容子」[7]の少年に出会う。「……家を滅ぼしとうは、ない！」[8]――少年がふと洩らした一言をきき咎めて、狂四郎が彼らしい気まぐれからその生家に足を向けると、旗本長岡釆女正重武が衣裳をすべて剥ぎ取った妻を責め苛んでいる場面に遭遇する。西の丸の将軍家世子（西城府）に妻を犯されながら、反抗することを許されない臣下の旗本の、それは絶望と憤怒に駆られた虐待の光景であった。妻の顔にさげすみの色が浮かぶのをみた釆女正が、逆上して妻の胸元に槍を突き立てようとしたとき、狂四郎がとび込みざま槍を両断すると、はねとんだ穂先は不運にも釆女正の咽喉もとに突き刺さり、一瞬裡に彼を絶命させてしまう。「差し出がましいことをした。ゆるされい」と、狂四郎が詫びて廊下へ出ると、そこに立ち尽くしていたのは「目も唇も凍てついたようにこわばらせ」た件の少年であった。名状しがたい負い目に、かける言葉を失った狂四郎が姓名を名乗り、「……父上の仇を討ちたければ、どれほどの助太刀をたのまれてもよい」[9]と云いおいて立ち去ろうとすると、意外にも少年は「母上を、つれて行って下され」と口を開き、「母上が、ここに残されれば、死なねばなりませぬ。母上を、死なせとうはない。つれて行って下され」[10]と、懇願するのである。

行きがかり上、長岡家の妻女志津の身柄を引き受けることになった狂四郎は、

志津を懇意の講釈師立川談亭に預けると、自分からは滅多に訪れることのない武部仙十郎邸へ赴く。西城府家慶の近況を聞き糺すためである。狂四郎の問いに、仙十郎は重い口を開き、「この半年のあいだに、とうてい考えられぬこと、信じ難いことが、その行状に現われて居る」[11]と、西城府の行跡が頓に乱れてきたことを告げる。忠勤一筋の植木職人を無礼討ちにしたり、旗本の妻女を次々に犯したりする非道を重ね、その乱行がもとで旗本８軒がすでに閉門の憂き目を見ているというのである。天資英邁を謳われた家慶の身に一体何が起きたのか。人柄が豹変してしまったのか。それとも秘密が隠されているのか。この異変をめぐって狂四郎が謎の解明に乗り出し、その鍵を握っているとおぼしい近藤重蔵という人物をめぐる物語が展開するのが、江戸を舞台とする前半部分である。

シリーズには作品ごとに狂四郎の前に立ちはだかる敵方の領袖が登場するが、『虚無日誌』でその役回りを演じるのが幕府目付佐野勘十郎である。野心家で利け者のこの目付との対決にリアリティを持たせ、物語に厚みと奥行きを与えるために、作者は蝦夷地偵察で功のあった実在の人物近藤重蔵をめぐる史実を下敷きにしたプロットを組み立て、そこへ家慶の双生児として生を享けた実弟がいたという虚構をからめて、勘十郎の野望の背景を描き出していく。[12] すなわち、30数年前、北蝦夷と千島列島の偵察に赴いた近藤重蔵は、択捉島で葵の御紋を掲げる館を発見し、そこで敏次郎と名乗る少年と邂逅していたが、その偵察に配下の一人として同行したのが若き佐野勘十郎であったこと、そして重蔵一行が出会った少年こそ家慶の双子の弟で、双生児を忌み嫌う当時の風習から人知れず闇に葬られようとしたところを大奥の何某かの手で秘かに救い出され、遠く択捉の地で長じていたという筋書きが仮構されるのである。重蔵はそののち郷里にもどり、4年前に江州の地で逝去したことになっていたが、じつは広見堂と名を変えて今は江戸に暮らしており、他方、勘十郎の方は異例の抜擢を受けて公儀目付となり、西城府の乱行をことごとく隠蔽糊塗する働きをしていたのである。いまや幕閣の中枢で上役の若年寄さえ一目置くほどの隠然たる権力を握る勘十郎が、将軍家世子生誕をめぐる、絶対に口外すべからざるこの秘密を知る近藤重蔵を亡きものにしようとするのは当然であった。敏次郎を籠絡し、贋家慶に仕立てて次期将軍職に就かせ、自らは黒幕として幕政を牛耳ろうというのが勘十郎の野望だったからである。

物語はこのように虚実を織り交ぜて前半から中盤、後半へと移っていくが、将軍家世子をめぐる騒動の渦中に、好むと好まざるとにかかわらず身をおくことになった狂四郎は、事態の真相を追って中仙道を西へ向う。西の丸にある家慶が本物でないとすれば、贋者とすり替わったのは家慶本人が将軍家代理として上洛した折であり、それを確かめるべく京へ旅立つのである。途中、狂四郎は真田黒丸やおりょうといった、幸村の遺訓をまもる真田六連銭組の後裔たちにも助けられながら、敵方の刺客と巧妙な計略を次々に斥けて京に到着し、洛中、洛外、奈良へと探索の手をひろげて、ようやく家慶本人の居場所をつきとめる。家慶は不憫な身の上の弟を思う兄の心境から、なかば自発的に閑居の身となり、斑鳩寺（法隆寺）にとどまっていたのである。

『虚無日誌』が主人公の“虚無”の諸相を描き出していく作品である以上、陰鬱な色調が支配的になるのはやむを得ないことかもしれない。しかし作者は、諧謔や軽妙洒脱、あるいは主人公をめぐる恋模様などを巧みに交えて、暗くなりがちな雰囲気を和らげる工夫を凝らしている。シリーズの特徴のひとつに、狂四郎に想いを寄せる女性たちの一途さがメロドラマ的色彩を添える点が挙げられるが、この作品で中心的なヒロインの役割を与えられるのが長岡家の妻女志津で、西城府の乱行によって運命が暗転する幸薄いこの女性と狂四郎との愛の行方が副筋として物語に織り合わされていく。また主人公を取り巻く脇役たちの個性も印象的で、『無頼控』に登場以来、狂四郎の一の乾分を自称する巾着切りの金八は、江戸っ子らしい洒落っ気と剽軽さで絶妙のアクセントとなっているし、狂四郎が心を許す知己のひとりであり、彼の良き理解者でもある立川談亭はその飄々とした人柄で、滋味あふれる名脇役としての存在感を発揮している。なかでも秀逸なコミック・リリーフとなりえているのが、講釈場で談亭が披露する名調子である。

「さっても、時はいつなんめり、天延四年春なかば、渡辺綱は上意にて、さしかかったる一条堀川戻橋――」

立川談亭は、高座で、張り扇で読み台を叩いておいて、夏羽織を脱ぎすて、「月もおぼろの七つ刻、アレ鐘が鳴る、犬が啼く、いま鳴る鐘は、初夜の鐘――。渡辺綱は、足停めて、小手をかざして、はてこは如何に、そこにたたずむ女人の影は、人目を忍ぶ紅梅打着、伴もつれずに、しょんぼりと、待っていたかと、手と手をからめ――アレ主さま、雨が、と見交わす顔を蛇目に

かくし、濡れぬようにと濡れに行く。いい風情だねえ。左褄を、こう、取って、明石からほのぼのと透く緋縮緬――(後略)」[13]

もちろん、シリーズのもうひとつの特色といえる道中記の要素も内包されていて、中仙道を経た京洛への旅が描かれている。「わたしは、一所不住の漂泊の素浪人であり、それをむしろ、いささか、心中誇っているところもある」[14]と語る狂四郎にとって、旅することが彼の人生そのものであるというアナロジーはこの作品でも成立しているとみることができる。しかし、文字通りの道中記仕立てであった前作『孤剣五十三次』とはちがって、『虚無日誌』では宿駅ごとの風物や景勝を描き出すことが主眼とはなっていない。京までの道中と、洛中、洛外で起こる事件や出来事、そしてそれらをめぐる主人公の出会いと別れが、虚無的な翳の濃い主人公の歩みを際立たせる役割をはたすといえばよいであろうか。いずれにせよ、この第５作では暗い宿命を背負い、「孤独に堪えようとして、無明の道を歩む」[15]主人公のすがたを描き出すことが焦点であり、それを浮き彫りにするために作者は狂四郎のニヒルな影像(シルエット)を、陰翳に濃淡のグラデーションをつけつつ映し出していくのである。

III　主人公の“ニヒル”と“有情”

それでは眠狂四郎の体現する“ニヒル”は、具体的にはどのように表現されているであろうか。まず初めに、ことばの意味を確認しておくならば、「冷たく醒めていて、暗い影のあるさま」[16]と辞書で定義される“ニヒル”は、古代ローマの政治家・雄弁家・哲学者キケロのことばに由来するラテン語の成句「ニル・アドミラリ」(nil admirari)にもとづき、「何事にも驚かないこと」を意味するという。[17]「何事にも驚かない」姿勢といえば、『現代生活の画家』所収のエッセイでボードレール（Charles Pierre Baudelaire）が語るダンディの不感無覚、すなわち「人を驚かすことの快楽、決して驚かされることはない」[18]という不逞な心性が想起されるが、狂四郎がニヒルに映るのも、ひとつには彼がダンディのこの心性を持ち合わせているからである。作者はニヒルという語こそ用いてはいないが、同義語である虚無を要所要所で用いることで、何事にも動じない狂四郎のすがたを印象づけている。

III-1　孤独と懐疑

「虚無の翳の深い」[19] 主人公の個性を特徴づけるものとして先ず指摘できるのが、彼の孤独な生のスタイルである。「眠狂四郎という男は、その悲惨な宿命を背負っているが故に、おのれの孤独をみだしたり、しばろうとするものがあれば、それを冷然としりぞけてはばからぬ」[20] とは、『魔物と感情～柴錬女性論～』というエッセイに記された作者の言葉であるが、江戸の往還を行くときも旅先にあっても、狂四郎は独歩を好み、事にあたるにさいしても基本的には独行を常とする。しかし一方で、彼は孤独を売り物にしたり、孤独の中に立てこもったりするような真似はしない。「何事にも拘泥せず何物にも駆られない」[21] 生き方を身につけているからである。狂四郎は「孤独の自由を、自己修練や精神修養のためにまもるのでなく、まもることにすこしも不自然でなく生きて行ける」[22] 人物として描かれているのである。

次に狂四郎の“ニヒル”を裏づけるものとして、彼の醒めた自意識と懐疑の心を挙げることができる。狂四郎の懐疑について、柴田はこう記している。

> この男は、おそろしく、剣に強い。いったい、これまで、何十人いや何百人を斬りすてたことだろう。にも拘らず、この男が、狂人たることからまぬがれているのは、懐疑を抱いているからだ。
>
> 狂人は、決して懐疑を抱かぬ。（中略）
>
> 眠狂四郎は、円月殺法をつかって、人を斬るが、決して、兇暴性にかられてそれを為すのではない。円月殺法そのものが、敵をして空白の眠りに陥らせて、斬られる恐怖をのぞいてやって、一撃をくわえる術なのである。すなわち、敵には眠りを与え、おのれは人を斬るという無慚な罪の業念で魂を疼かせる――いわば自虐の表現なのである。さらに云えば、彼は、斬ろうと意志を働かせるや、必ず斬るが――その自由な行為は、自由なるが故に、懐疑的なのである。[23]

ここで語られているのは、狂四郎が決して逆上して剣をふるうのではないこと、そして剣の動きは変転自在であるが、そこには絶えざる懐疑に裏打ちされた判断が働いており、「その自由な行為は、自由なるが故に、懐疑的」であるという

ことである。「懐疑は賢者の冠である」[24]と語ったのはE.アラン(Émile Auguste Chartier Alain)であるが、狂四郎もまた「いま自身の為していることを、絶えず疑い乍ら、生きている」[25]人間なのである。

III-2　内なる有情

狂四郎の“ニヒル”を内面的に支えるのが彼の孤独と懐疑の精神であるとすれば、「人間・鳥獣虫魚など感情をもつすべての生きもの」という語義に加えて、「愛憎などの心情がわかること」[26]という意味を有する“有情”は一見、狂四郎には似つかわしくない語のようにもみえる。だが“ニヒル”と“有情”は本当に対立する語であろうか。少なくとも柴田錬三郎の小説宇宙においては、わけても眠狂四郎を中心に整序された物語宇宙では、“ニヒル”と“有情”をただの対立概念とみるだけでは片づけられないものが表現されている。というのも、ニヒルな仮面の下に血の温みを隠し、無頼な所行の奥にやさしさを秘めるという、逆説そのものであるような人間存在のかたちこそ眠狂四郎という作中人物の根幹をなす特質だからである。あえていえば眠狂四郎のダンディズムの本質をかたちづくるのは、“ニヒル”と“有情”を中心とする多様な二項群の総体であると捉えることさえできるのである。

ちょうど『無頼控』の中で“無頼”が狂四郎の“やさしさ”の裏返しとして表現されていたように、『虚無日誌』における彼の“ニヒル”は冷酷非情のあらわれというよりも、胸中に秘めた“有情”を他人に悟られないための仮面の役割をはたしている。換言すれば狂四郎のポーカーフェイスは内なる真情を擬装するポーズとしての意味合いを持っているということである。むろん、だから狂四郎が温情にあふれた正義漢だというのではない。狂四郎は敵に対しては必殺の剣をふるい、女性に対しても相手の出方次第で酷薄な所行に及ぶことも珍しくない。しかし彼の虚無は、何ひとつ信じるものを持たない真正のニヒリストのそれとは自ずから性格を異にする。志津の問いに対する談亭のことばがひとつの手がかりを与えてくれる。

「これまで、かぞえきれぬほどの人命を、あの世へ送られましたし、薄倖な女人に対して、ずいぶん無情な仕打ちもなさいました。こちらが、親しくなって、狎れようとすると、急に、冷たく厳しく、心をぴしゃりと閉じておし

まいになります。……哀楽、時を失えば、殃咎（おおきゅう）必ず至る、という言葉が、左伝にございますが、まるで、それを、地で振舞っているようにみせかけているところがございますな。……しかし、心の奥底では、人を愛するということを、人一倍知っておいででございますよ。愛してその悪を知り、憎みてその善を知る――そういう御仁でございますて。」[27]

談亭が云うように、狂四郎は「人を愛する」ことを誰よりもよく知る男であり、胸中に温もりやいたわり、あるいは慈心とすら呼べる心情を秘め持つ人間なのである。

事実、狂四郎の心奥を窺い知るよすがは、要所要所にさりげなくちりばめられている。「この男が、心を締めつけられて、人間らしい表情に還るのは、無心な子供の哀しい姿に接した時にかぎられていることは、これまで、いくたびも述べたところである」[28]と作中で語られるとおり、無垢なるものへ向けられる主人公のまなざしは、ニヒルな仮面の下の彼の素顔を窺わせるが、そればかりでなく松次郎や武部仙十郎といったお馴染みの面々とのつきあいの中にも狂四郎の内なる真実の一端をみることができる。行商の薬売り時代、狂四郎と道中をともにして幾度も命にかかわる危難に遭いながら、松次郎がこの異相の浪人者に寄せる親しみは、ポーカーフェイスの奥に隠された狂四郎の人柄を暗示するものであるし、くされ縁ともいえる仙十郎との間柄にも狂四郎の真情が垣間見える。彼を死地へ赴かせる仕事をぬけぬけと何喰わぬ顔で依頼する老人は、酸いも甘いも噛み分けた古狸のような存在であるが、その老人に対して狂四郎が抱く想いはニヒルな相貌とはおよそかけ離れたものである――「老人はすでに古稀を越えているので、娑婆をふさいでいる歳月も、さほど長くはないと思われる。しかし、もし老人が逝ったならば、こちらの寂寥感は、名状しがたいものがあろう。」[29]

狂四郎の人となりは、しかし身近な人々とのふれあいの中にのみ窺えるわけではない。明日心剣という異名をつかう敵方の刺客篠原雄次郎とのあいだにも、敵味方という隔たりを超えた心情、雌雄を決すべき宿命を負いながら、剣に生きる者同士でなければ感じとれない心のつながりが描かれている。[30]

そして、表立ってというよりも裏面から狂四郎の内面を照らし出すのが、日陰で生きる忍びの者たち――真田六連銭組のおりょう、真田黒丸や、猫兵衛、

犬助、猿太といった伊賀忍者たちである。一度は敵方に雇われて狂四郎を陥れようとした真田黒丸と、狂四郎を慕い、いくども彼の窮地を救うおりょうは、ともに自己犠牲を厭わぬ忠義の精神を見せるし、薄気味わるくて「畏怖心が払いきれぬ」と、狂四郎を評する犬助にむかって、仲間の猫兵衛が語ることばも、狂四郎の内面の構図を言い当てている――「わしは、あの御仁に、地獄越えの嶺の茶屋で、はじめて顔を合わせた時、――この浪人衆は、屹度不幸な素性に生れて、不運な育ちかたをされたが、心の奥底では、あたたかいものを持っておいでだな、と察した。それから、京までの道中を、供をしているうちに、わしのカンは中っていた、と知った。」[31]

もとよりこうした人々との交流の陰に、不幸な星のもとに生まれた主人公の死生観が隠されていることはいうまでもない。物心ついたころから狂四郎は、転び伴天連の姦淫の子として孤独な人生を歩んできたのである。漂泊の俳人芭蕉は、人生とは別れであるとの認識を持っていたといわれるが、「一所不住の漂泊」者たる狂四郎にとっても、人生は文字通り出会いと別れであった。狂四郎が盂蘭盆に３基の墓のまえに佇む習慣も、[32] 世間に背を向けて生きる男らしからぬものと見えて、そのじつ彼が心のうちで大切にしている価値を示唆している。15 歳で母を喪い、のちに最愛の妻美保代と従妹である静香の早世をも看取った狂四郎は、不幸であったこれら３人の女性を渋谷の丘陵上に葬り、みずから自然石の墓を立てて霊の一字を刻んだのである。ダンディズムを「一個の落日」[33] に譬えたのはボードレールであるが、落日は一日の終わりであるとともに終末の表象でもある。悲しみも苦悩も心の内に秘める生き方を貫く狂四郎には、ダンディズムの落日こそがふさわしい。しかもなお「おのれが歩いて行くところに、さまざまの悲劇が起る。その暗い思い出を、脳裡に刻んでおいて、次の場所へ痩身をはこんで行くのが、眠狂四郎の宿命」[34] なのである。

IV　果断な行動力

しかしながら眠狂四郎のダンディズムについて語るには、“ニヒル”と“有情”をめぐる心性のドラマについての考察だけでは充分ではない。作品の枠組みとなる外的な状況設定にも目を向けておく必要があるからである。物語の導入部に、長岡邸へ向う狂四郎の胸中に「ふっと、ひとつの予感が起」る場面が描かれている――「あの建物の中へ踏み込むと、なにか、ひどく重い荷を背負

わされることになる。そんな不吉な予感」である。

この男の感覚は、未来に待つ不幸な事柄に対しては、きわめて正確な働きをするようにつくられていた。これまで、それは、はずれたことがなかった。

にも拘らず、予感が起った時、一度も踵をまわしたことがないのも、この男らしい生きかたなのであった。[35]

「未来に待つ不幸な事柄」に対して決して背を向けることのない狂四郎の生きざまが語られている。生命にかかわる危機や凶事が目の前に待ち受けていようと、踵を返したり、そこから逃げ出したりしない狂四郎の果断な行動力が作品冒頭で明示されるのである。こういう不器用なまでに一本気な狂四郎の性格は、作中でくり返し言及される。

「……ただ、なんとなく乗りかかった舟に、乗ってみるだけのこと、という以外の気持はない。」[36]

「談亭、頭上に火の粉が降りかかった時、わたしが、一度でも逃げたことがあるか？」[37]

「仰(の)るか返(そ)るか咽喉吭(のどぶえ)の針だな。これまで、そうして来たし、これからもそうするのが、わたしの流儀だ。猫兵衛にしても、お前にしても、おのがやりかたで、今日まで生きて来たのだ。人間というやつは、どうやら、一本の道筋しか辿れぬように生れついているらしい。」[38]

ここで主人公の行動規範に言及したのは、彼の決然たる姿勢をいっそう鮮明にする外的条件が作品冒頭で設定されているからである。長篇、短篇を問わず柴田作品には、不測の事態が運命を左右するというモチーフがしばしば組み込まれている。“瞬間”、“突如”、“不意に”、“刹那”、“遽かに”といった語が頻出するのも、このことと無関係ではない。これらの語は事件や事態の突発性、刹那性を意味するとともに、作品に底流する主題そのものとも響き合っている。すなわち、丁半ばくちのように、すべてが紙一重の偶然によって決するという

不条理な、しかし牢乎たる現実を、それは暗示しているのである。

通り雨が少年を狂四郎に引き合わせ、しかもその屋敷に足をむけた狂四郎の気まぐれが彼を異変に巻き込んでいく物語の幕開きを、改めてここで想い併せてみるべきかもしれない。ふとした偶然が人生を左右するというこの劈頭の図式は、物語の中盤と終盤でも言及されている。

> 梅雨のうっとうしい日、旧知の松次郎がひらいている諏訪町角の「ニ八蕎麦」に立寄り、一人の旗本の少年と言葉を交わしたのが、きっかけで、松次郎に、
> 「旗本が一軒、どういう滅びかたをするか、それを見とどけて来る。」
> と、云いのこして、店を出た——その時から、知らず知らずに、この異常な秘密の渦の中へ、おのが身はまき込まれていたのだ。[39]

> ——そうだった。通り雨が、おれを、このたびの異変にまき込んだのであったな。」（中略）
> 「……家を滅ぼしとうはない！」
> 少年が、ふと口をすべらせたその一言を、狂四郎は、きき咎めて、ふっと、その屋敷の内部を覗いてみる気を起したのであった。
> おのが身をはこんだところに、必ず凶変が起ることを、つい忘れていたといえる。
> ——おれが、乗り込まなければ、長岡釆女正は、横死せずに済んだかも知れぬ。（後略）[40]

ささいな偶発事が人生の岐路になるという、柴田作品の定型ともいえる構図が物語の枠組みとして噛み合されることで、主人公の果断な行動力を一段と際立たせる効果を生んでいる。“ニヒル”と“有情”を二つながら包摂する狂四郎のダンディズムがひときわ光彩を放つのもこのような文脈においてであり、その意味では『虚無日誌』は、外的偶然を内的必然へと転じうる主人公の精神の力量を形象化した物語とみることもできるのである。

V　結びにかえて

文壇のダンディといわれていた柴田は、苦虫を噛み潰したような仏頂面でも知られていたが、親しかった文士仲間によれば、実際には情に厚い面倒見のいい人であったという。ニヒルな相貌の下に温もりを匿す眠狂四郎と二重写しになる逸話であるが、その狂四郎について作者は、すでに「十七年のつきあいだから、かれが、書斎に出現するのが、いい加減うんざりして来た」と語ったうえで、「もう、君のやったことも、ききあきたし、君自身、私に語ることもないだろう」と狂四郎に話しかけてみるという。それにつづく想像裡の両者の対峙は次のようなものである。

狂四郎は、おそろしく無口な男だから、こういう場合、ほとんど返辞をしない。

二人で対座していて、無言が数時間もつづくと、私は、イライラして来る。

こうなると、意地になって、私は、狂四郎の口をひらかせたくなる。根くらべである。私自身、かれが口をひらくまで、断乎として、かれが立去るのを許さぬ頑固さと辛抱強さがある。

根くらべに負けた狂四郎が、

「二年前の秋、京都のある寺の山門に、にわか雨をさけて、佇んでいたことがある。その折、若い女が、そばへ駆け込んで来た」

と、それだけのヒントを与えておいて、すっと、姿を消す。

そこで、私は、原稿用紙に、その描写をはじめる。

すると、私は、ペンを走らせるうちに、なんとなく、かれがまき込まれた事件が頭脳にうかんで来る。[41]

狂四郎を主人公とする物語がどのように発想されるかを示唆していて興味深いが、ここでもうひとつ注目されるのは、こうして着想された物語が「大衆というものが常に、何かを期待している――その期待に応える」[42]という目的のために一貫して紡がれつづけたという点である。ここにいう「大衆」「の期待に応える」とは、大衆に迎合する物語を世に送りだすということではない。虚構としての物語の魅力を読者に提供する使命を、作家が自らに課していたという意味である。小説は虚構であるとの信念を持っていた柴田は、人生の不条理や人間の運命、欲望、業の深さといった主題をくり返し取り上げながら、その“花も実もある絵空ごと”の小説宇宙に、いかに生きるべきかの説法や人生批評を持

ち込む手法をとらなかった。『魔物と感情』のあとがきに、次のような一文がある――「ただ、私が、いささか自慢できるとすれば、どの文章にも、処世上の教訓めかしたことを書いていないことであろうか。」[43]

作品に説教や処世訓を持ち込まない姿勢は、『虚無日誌』の中でも貫かれている。眠狂四郎の行く手に起るさまざまな悲劇や運命を描きながら、作者は人としての倫理や生き方を作品内で説くことをしなかった。“読者の期待に応える”という使命のためにモラルや教訓を控えるという、小説家としての節度を重んじたのである。ちょうど小説宇宙に生きる狂四郎が自身の胸中を明かさぬ仮面演技者であるように、作者もまた文学の仮面を通じて真実を語る演技者の役割に徹していたといえるであろう。柴田がダンディズムの美学を通じて、存在そのものがひとつの逆説であるような主人公を造型し、その醒めた意識に映じるこの世の動かしがたい真実を、小説という虚構の中に封じ込める道を選んだゆえんもそこにある。柴田は、小説が虚構の言語芸術であることを知っていた真の文学者のひとりであった。

注

1 昭和31年に『週刊新潮』への連載が始まった『眠狂四郎無頼控』は昭和33年に計100話で完結したが、翌34年には『眠狂四郎無頼控・続三十話』が書き足され、現在では計130話からなる『眠狂四郎無頼控（一）～（六）』（新潮文庫）として流布している。

2 柴田錬三郎「眠狂四郎の生誕」『新篇眠狂四郎京洛勝負帖』、集英社＜文庫＞、2006年、296頁。

3 柴田は、机竜之助の“机”のイメージの持つ親しみやすさに触発されて、人間にとって不可欠な“眠”を主人公の姓とする着想を得たことを語っているし、狂四郎の造型にさいして机竜之介の人物像を念頭においていたことは間違いない。柴田「眠狂四郎の生誕」『新篇眠狂四郎京洛勝負帖』、296-297頁を参照。

4 飛鳥井雅道「ニヒリズムの終えん」『朝日新聞』、1978年7月3日付夕刊、5面。

5 清原康正「解説」、柴田錬三郎『新篇眠狂四郎京洛勝負帖』、307頁。

6 柴田「武蔵・弁慶・狂四郎」『新篇眠狂四郎京洛勝負帖』、289頁。

7 柴田錬三郎「少年必死」『眠狂四郎虚無日誌』、新潮社〈文庫〉、1979年、7頁。なお、引用文中のルビは、少数の例外を除き省略した。

8 同書、9頁。

[9] 同書、17 頁。

[10] 同書、18 頁。

[11] 柴田「襲撃」『眠狂四郎虚無日誌』、25 頁。

[12] この物語におけるアイデンティティの主題、あるいは本物と贋者のすりかわりのモチーフは、文学の根源的テーマである外見（アピアランス）と内実（リアリティ）の問題を介して、狂四郎自身のアイデンティティや、シリーズに通底する仮面と素面のテーマにも通じていると考えられる。

[13] 柴田「襲撃」『眠狂四郎虚無日誌』、18頁。

[14] 柴田「通夜の客」『眠狂四郎虚無日誌』、344頁。

[15] 秋山駿「解説」、柴田錬三郎『剣鬼』、新潮社＜文庫＞、1977年、412頁。

[16] 松村明監修、小学館大辞泉編集部編『大辞泉　第二版　下巻』、小学館、2012年、2754頁。

[17] 竹林滋編集代表『研究社　新英和大辞典　第6版』、研究社、2002年、1673頁。

[18] シャルル＝ピエール・ボードレール「現代生活の画家」『ボードレール全集IV　散文詩　美術批評 下　音楽批評　哀れなベルギー』、阿部良雄訳、筑摩書房、1987年、166頁。

[19] 柴田「少年必死」『眠狂四郎虚無日誌』、6頁。

[20] 柴田錬三郎『魔物と感情～柴錬女性論～』、勁文社、1976年、133頁。

[21] E.アラン「精神と情熱とに関する八十一章」『小林秀雄全翻訳』、講談社、1981年、698頁。この文言を、ラ・ブリュイエールのことばとしてアランが引用している。

[22] 柴田錬三郎『魔物と感情～柴錬女性論～』、133頁。

[23] 同書、131-132頁

[24] E.アラン「精神と情熱とに関する八十一章」『小林秀雄全翻訳』、648頁。

[25] 柴田「お茶壺道中」『眠狂四郎虚無日誌』、480頁。

[26] 北原保雄編『明鏡 国語辞典』、大修館書店、2002年、150頁。

[27] 柴田「母恋い」『眠狂四郎虚無日誌』、40-41頁。

[28] 柴田「通夜の客」『眠狂四郎虚無日誌』、338頁。

[29] 柴田「襲撃」『眠狂四郎虚無日誌』、22頁。

[30] 柴田「関ヶ原決闘」『眠狂四郎虚無日誌』、428-433頁。また同書「鼠族」、568-569頁、「切腹の座」、638-639頁、等も参照。

[31] 柴田「片足遁走策」『眠狂四郎虚無日誌』、518-519頁。

[32] 柴田「魂棚」『眠狂四郎虚無日誌』、102-103頁。

[33] ボードレール「現代生活の画家」『ボードレール全集IV　散文詩　美術批評 下　音楽批評　哀れなベルギー』、168頁。

[34] 柴田「中津川心中」『眠狂四郎虚無日誌』、408頁。

[35] 柴田「少年必死」『眠狂四郎虚無日誌』、13頁。

[36] 柴田「日本橋焼き」『眠狂四郎虚無日誌』、76頁。

[37] 柴田「不義成敗」『眠狂四郎虚無日誌』、116頁。

[38] 柴田「鳥羽絵」『眠狂四郎虚無日誌』、556頁。

[39] 柴田「吹上茶屋」『眠狂四郎虚無日誌』、253-254頁。

[40] 柴田「切腹の座」『眠狂四郎虚無日誌』、635頁。

[41] 柴田錬三郎「作家の発想について」『どうでもいいことばかり』、集英社、1978年、112-113頁。

[42] 尾崎秀樹「解説」、柴田錬三郎『生死の門』、集英社〈文庫〉、1978年、378頁。

[43] 柴田『魔物と感情～柴錬女性論～』、276頁。

（信州大学 全学教育機構 教授）

2015年2月27日受理　2015年2月28日 採録決定